

討 論 の 要 点 と 集 約

西 勲・後藤 寛治・新田 一彦

第14回北海道草地研究会において、会員約130名出席の下で、「草地更新について」をテーマに第5回シンポジウムが開催された。

3名の話題提供者を予定していたが、伝法卓郎氏が急逝されたため、司会者の西勲氏より、伝法氏の略歴が紹介され、さらに同氏が北海道における公共草地事業の設計と実施に草分け的な役割を果たされたこと、その貢献がきわめて顕著であったことが述べられた。

最初に伝法氏が幹事に委託された「北海道における草地開発事業の史的発展」と題する遺稿(会報に掲載)を顧問の三股正年氏が代読された。

ついで、脇本隆氏が、「混播牧草の草種構成の推移」について講演された。質問は1問に限られ、草種構成の推移と環境要因—とくに水分条件についてであったが、経験的にチモシーは土壌水分に恵まれた環境に適すると思われるが、オーチャードグラスと共存する場合には抑制される傾向があり、この関係は根釧地方に限らず、両草種の進攻性に関する特性によると返答された。10分間休憩の後、赤城仰哉氏の「採草地の維持管理と更新方式について」と題する講演があり、その後、脇本氏の講演内容を含めて、総合討論が行われた。討論内容は、ほぼ時間の推移により記載したが、質疑を受けて下さったのは脇本、赤城の両氏である。

○草地の維持

草地の衰退に関連していくつかの質問があった。施肥が十分ならば、オーチャードグラスでは維持が可能と思われるが、チモシーではNの多施が衰退を早める形となるので、Nをひかえマメ科牧草の維持により生産性を保つべきである。

また、維持年限について、5～6年以上が可能かとの質問には、肥培管理が適切で混播割合を維持すれば永続は可能で、しかも収量は4.5t/10aを確保できるであろうと返答された。

○草種構成の推移に係わる要因

早種構成は、気象・土壌条件さらには管理の様式によって変化すると思われるが、主要な要因は何か、とくに構成草種の作物学的な差異は何かと問われたのに対して、チモシーの根量が最も少なく新根が秋から初冬に向けて発生すること、オーチャードグラスの根量は多く、しかも古い根と新しい根の代替が順調であること、さらに、メドーフェスクの根量は最も多いが年数を経るとルートマットを形成することなどが指摘され、オーチャードグラスとメドーフェスクのチモシーに対し優位になる機作が根系に基づいて説明された。

○播種期

秋播きに対する反応の草種間差異、つまり越冬性の差異が問題になったが、日高地方で9月下旬の播種に耐えたのはチモシーであり、オーチャードグラスは9月上旬が限界であること、

霜害の被害が、越冬の大きな阻害要因とみなされたことおよび根釧地方ではマメ科草種（土壌凍結に弱い）は、8月20日が限度と思われることが指摘された。

○根釧地方におけるオーチャードグラスの可能性

根釧地方においてオーチャードグラスが定着しにくい原因を質されたのに対し、オーチャードグラスの施肥・管理技術は確立されているが、農作業面への適用が必ずしも適切でないこと、また、オーチャードグラスの適応地帯を図示すべきであるという提案が過去にあったが、まだ実現していないことが述べられた。

○合理的な混播組合せ

どのような混播組合せが合理的であるのかという質問に対して、従来慣行的に行なわれてきたチモシーとオーチャードグラスの混播は不都合であること、チモシーの単播はマメ科牧草の必要性を無視しており施肥管理的にも望ましくないこと、一方、ラジノクローバはチモシーの混播相手としてふさわしいと思われるとされた。ただし、レッドトップの侵入が多い地帯では、十分な注意が必要であるとしてつけ加えられた。

○今後の研究に対する要望

司会者の一人、西氏より、討論の結びとしてつぎのような意見が述べられた。

普及面では、更新の問題を重要視している。

普通4～5年、大規模草地では7～10年で更新を行なうのが適切と思われる。いずれにしても、マメ科牧草を草地に入れることが必要である。現在、牧草収量は、全道平均35t/10a強であるが、よく管理されている草地では6～8t/10aと高い所もあり、これを維持するためには、今後一層、更新に努める必要があろう。過去20年間の研究は、時間の割には成果が上っていると思われるので、今後の展開に大きな期待を寄せるものである。